

2024 年度年次報告書

社会課題を解決する人間中心インタラクションの創出

2024 年度採択研究代表者

石川 光彦

一橋大学 社会科学高等研究院

講師

乳児期からの社会脳ネットワーク形成メカニズムの解明

研究成果の概要

2024 年度は、本研究プロジェクトの本格始動に向けた準備段階として、機材の整備、研究倫理の承認取得、参加者リクルート体制の構築、実験刺激およびプログラムの開発を中心に取り組んだ。まず、実験遂行に不可欠な機材として、視線計測装置、ワイヤレス心拍計、乳幼児用脳波計を新たに導入するため、一般競争入札を実施した。各機材は年度内に納品が完了し、今後のデータ収集に必要な装置はすべて整備された。

また、本研究はヒトを対象とし繰り返し測定を伴うため、全フェーズにわたる研究手続きについて包括的な研究倫理申請を行った。実験内容に加え、乳幼児と保護者の継続的参加への配慮などを明記し、所属機関の倫理審査委員会より正式に承認を得た。

さらに、縦断研究を支える参加者リクルート体制の構築にも注力した。オンライン上での実験日程予約システムを構築し、スマートフォンや PC から参加者が希望日程を選択できるようにした。加えて、大学キャンパス近隣の自治体の広報誌に募集広告を掲載し、子ども広場などにチラシを配布した。特に、国立市役所と連携し、生後 3～4 カ月児の定期健診において保健師が保護者にチラシを手渡し、研究の趣旨を説明する体制を整備した点は特筆される。このように、初年度段階で対象月齢の児を継続的にリクルートできる体制を確立できたことは、今後の追跡調査において大きな意義を持つ。

データ収集の開始に先立ち、フェーズ 1 で使用する実験刺激とプログラムの作成も完了した。これにより、刺激呈示と同時に視線・心拍・脳波の同期計測が可能となり、2025 年度からの本格的なデータ収集に向けた準備が整った。

以上のように、2024 年度は本プロジェクトの基盤形成にあたる極めて重要な年であり、機材・倫理・リクルート・実験設計の各側面において、計画通り順調に進捗したと評価できる。今後は、これらの準備を踏まえ、縦断的な発達データの収集を進めていく。